

## 国内経済情勢

### 概観

中小企業設備投資は引続き停滞気味であり、住宅投資も低水準に推移している。一方、輸出は自動車は欧米向け自粛等から落込みをみているが、全体としては高水準を維持している。また、大企業設備投資は一頃に比し増勢は鈍化したものの引続き堅調に推移している。この間個人消費は、秋物衣料の出足好調もあって極く緩やかながら持直し傾向にある。こうした中で、素材関連メーカーは生産抑制を続けており、このため在庫水準は、業種により区々ながら全体として引続き低下をみている。

9月の商品市況をみると、秋需期入りの割に荷動きに乏しく非鉄、天然繊維等一部品目には下押しする動きもみられ、全体として弱保合いとなった。この間、卸売物価は、為替円高による輸出入品の下落の一方、一般産業用、電力用C重油の値上げ等から保合いとなった。一方、消費者物価(東京)は生鮮食品や被服の値上りを主因に上昇したが、前年比上昇率は前月同様3%台となった。

金融面をみると、8月のマネーサプライの前年比伸び率は、前年の伸びが低かったことを主因に幾分上昇した。また、8月の全国銀行貸出約定平均金利は引続き低下したが、下げ幅は小幅となった。

8月の国際収支をみると、輸入の減少を主因に

経常収支(貿易収支季節調整後)の黒字幅は拡大し、長期資本収支も対日証券投資の増加から久方振りの流入超となったため、総合収支は黒字を記録した。この間、9月の為替相場は230円前後で推移した。

### 製品在庫は減少

8月の鉱工業生産(季節調整済み、前月比\*、速報)、同出荷(速報)は前2か月増加のあとそれぞれ-2.2%、-2.3%と減少した。

\* 以下増減率は特に断わらない限り、前月比または前期比(物価を除き季節調整済み)。

財別生産、出荷の特徴をみると、建設財(小形棒鋼、セメント)の生産が微増となったのを除き、各財とも生産、出荷が減少した。なかでも、資本財輸送機械は乗用車がモデルチェンジ前のライン切替え等から生産、出荷とも著減、また非耐久消費財では石油製品(灯油、揮発油)の値上げ(8月)を見越した手当買いの反動等から出荷減をみた。また一般資本財(化学機械、金属加工機械)の生産、出荷は前月増加の反動もあってかなりの減少となった。

この間、製品在庫は-2.1%となった。このうち素材関連在庫の動きをみると、小形棒鋼やアルミ地金が積上りをみたものの、化学製品、上質紙、アルミサッシ等はメーカーの減産継続を背景に、また、繊維製品、鉄筋コンクリート管等は輸出増や国内向け出荷増を主因に、いずれも在庫が減少した。

国内最終需要の動向をみると、まず設備投資関

係では、8月の機械受注(船舶、電力を除く民需)は自動車等製造業からの受注増加を主因に+2.9%と前月(+3.2%)に続き増加した。一方、8月の建設工事受注額(民間分、速報)は前2ヵ月減少のあと、2.6%増となった。また8月の公共事業契約額(前年比)は10.4%の伸びを示し、8月末の契約進捗率は60.4%となった(前年53.4%)。

この間、8月の新設住宅着工戸数(前年比、速報)は-9.5%と前年水準割れを続けている(前月-16.6%)。

8月の全国百貨店売上高(通産省調べ、前年比、速報)は家具、衣料品が伸び悩んだもののスポーツ用品、エアコン等が比較的高い伸びを示し、全体でも+6.6%とまずまずの売行きをみた。また9月入り後の都内百貨店売上高は冷気到来に伴う秋物衣料の出足好調もあって幾分伸びを高めている模様である。この間、耐久消費財の売行きをみると、これまで好調を続けてきたステレオ、ラジカセ等がこのところやや伸び悩んでいるが、一方、9月の乗用車新車登録台数(除く軽、前年比、速報)はモデルチェンジ車の売行き好調等から+12.3%と前月(+2.2%)に続き増加した。

雇用情勢をみると、8月の常用雇用は前月比横ばいとなったが、完全失業率は2.04%と3ヵ月連続の低下となった。また、有効求人倍率は0.69倍と前月と同水準で推移した。

#### 卸売物価は保合い

9月の商品市況は、冷延薄板、合繊(ポリエステル糸)等が強調を示したが、秋需期入りの割に荷動きに乏しく、棒鋼、非鉄、綿糸等一部品目には下押しの動きもみられ、また、7月来上昇歩調をたどってきた石油製品も下旬に至り高値警戒から反落するなど、全体として弱保合いとなった。

9月の卸売物価は保合いとなった(前月+0.5%)。これは、輸出入品が為替円高の影響から下落した一方、国内品が一般産業用、電力用C重油の値上げ等から上昇したためである。

9月の消費者物価(東京、速報)は、生鮮食品が台風の影響による野菜の大幅値上りを主因にかなりの上昇を示したほか、秋冬物衣料の高値出回りやタクシー代の値上げなどもあって、総合では2.0%の上昇となった。もっとも前年比上昇率では+3.9%と前月(+3.6%)に続き3%台の上昇にとどまった。

#### 貸出金利の低下は小幅化

9月の金融市場をみると、銀行券は1,974億円の還収超(前年同1,567億円)となり、月中の平均発行残高(前年比)は+5.4%と4月をボトムに持直し傾向を続けている(7~9月+4.9%、4~6月+2.1%)。一方、財政資金は国債発行額が非市場性国債の払込みのほか月末近く長期国債のシ団引受が行われたことから前年を大幅に上回ったため、揚超幅は3,994億円となり(前年同2,011億円)、月中の資金不足額は2,541億円(前年同1,419億円)となった。日本銀行は売出手形の決済でこれを調整した。

この間、コールレート(無条件物)は上記のような資金不足地合いを映じて月央までやや強含みに推移したあと、月末にかけては交付金支払い等から弱含みに転じ、結局月中では0.125%の低下となった(月末7.125%)。一方、手形売買レート(2ヵ月物)は、目先きの季節的な資金余剰地合を織込み、月中0.125~0.1875%低下した(月末7.25%)。

8月のマネーサプライ(M<sub>2</sub>+CD平残、前年比)は9.6%と前月に比べ幾分伸びを高めた(7月+9.0

%)。これには長期金利先高を見越した借り急ぎも多少影響しているとみられるが、前年の伸びが低かったことによる面が大きい。一方、8月の全国銀行貸出約定平均金利は引続き低下したが、下げ幅は-0.018%と小幅にとどまった(前月-0.033%)。

9月の公社債市況は、月初から中旬にかけて米国金利の小幅低下等から強含みに推移したが、下旬に入り金融債の売行き不振に悩む長信行からの売却増に加え中間決算絡みの都、地銀筋の売りが増えて反落し、結局通月では保含いとなった。この間、長期国債の応募者利回りは、9月発行分から0.408%引上げられた。一方、株式市況は、前月来の整理地合をうけて続落した。とりわけ月末にはニューヨーク株式市況の大幅下落を背景に外人の売り越し幅が拡大したこと等から波乱含みの展開となった(東証指数、月末550.27、月中-39.17)。

#### 長期資本収支は5ヵ月振りの流入超

8月の国際収支をみると、輸入の減少を主因に経常収支(貿易収支季節調整後)の黒字幅は851百万ドルと前月(147百万ドル)比拡大した。この間、

長期資本収支は現先を中心に対日証券投資が大幅流入超をみたことを主因に5ヵ月振りの流入超となり、この結果総合収支は601百万ドルの黒字となった。

8月の輸出(通関、ドルベース)は前月増加のあと-5.8%とかなりの落込みとなったが、数量ベースでは+0.4%と微増した。品目別(数量ベース)には、自動車が欧米向け自粛等の影響から大幅な落込みをみたが、合繊織物が米国、中近東向けに好伸したほか、ラジオ、テープレコーダー、船舶等も引続き増加した。

一方、輸入(通関、ドルベース)は、-13.4%と著減し、また数量ベースでも4.4%の減少となった。品目別(数量ベース)にみると、小麦、砂糖等が増加したものの、原油をはじめ鉄鉱石、綿花、非鉄金属鉱もかなりの減少を示した。

9月のインターバンク米ドル直物相場は米国金利の小幅軟化から月央やや円高になる場面もみられたが、総じてみれば230円前後で推移し、231円55銭で越月した(月中2円80銭の円安)。

(昭和56年10月13日)